

沢海川水系河川整備基本方針

1 章 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針（骨子）

平成 28 年 11 月

静岡県

目 次

第1 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針	1
1 河川及び流域の現状	1
（1）河川及び流域の概要	1
（2）治水事業の沿革と現状	2
（3）河川の利用	3
（4）河川環境	3
（5）住民との関わり	4

↓以下の項目を含め、次回審議において河川整備基本方針本文（原案）を提示

2 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針	
（1）河川整備の基本理念	
（2）河川整備の基本方針	
ア 洪水、津波、高潮等による災害の発生の防止または軽減に関する事項	
イ 河川の適正な利用、流水の正常な機能の維持及び 河川環境の整備と保全に関する事項	
ウ 河川の維持管理に関する事項	
エ 地域との連携と地域発展に関する事項	
第2 河川の整備の基本となるべき事項	
1 基本高水並びにその河道への配分に関する事項	
2 主要な地点における計画高水流量に関する事項	
3 主要な地点における計画高水位及び 計画横断形に係る川幅に関する事項	
4 主要な地点における流水の正常な機能を 維持するため必要な流量に関する事項	
(参考図) 仁科川水系図	巻末

第1 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針

1 河川及び流域の現状

(1) 河川及び流域の概要

<位置関係・支川・流域面積・流路延長>

- ・ 沢海川は沼津市戸田に源を発し、西に流れ駿河湾に注ぐ、流域面積約 1.0km²、幹線延長約 0.35km(指定区間)の 2 級河川である
- ・ 河口部には戸田漁港が位置している。

<地形・地質・河道特性>

- ・ 沢海川流域は、伊豆半島北部の駿河湾に面した「達磨火山地」内にあり、河口は戸田港に注いでおり、周囲は火山山地となっている。
- ・ 流域の全体が達磨火山噴出物でおおわれている。
- ・ 河床勾配は、上流区間が 1/8、中流区間が 1/18、下流区間が 1/29 の急峻な河川である。
- ・ ほぼ全区間が掘込河道であるが、一部が築堤となっている。

<気候(気候区・気温・降水量)>

- ・ 流域の気候は、夏季は高温多湿、冬季は温暖少雨で表日本式気候(太平洋型気候区)に属し、平均気温は 16.2℃と温暖で、年平均降水量は 1,780mm と、全国平均の 1,683mm と同程度である。

<土地利用>

- ・ 流域の土地利用は、山林が約 97%(平成 21 年度)と大部分を占めるほか、河川に沿った谷底平野に宅地や田畑が分布している。
- ・ 土地利用の変化については、市街地の面積は昭和 62 年以降大きな変化は見られない。

<人口>

- ・ 流域を含む沼津市戸田地区の人口、世帯数は、平成 28 年時点で約 3,000 人であり、昭和 35 年の 5,913 人をピークに減少を続けている。
- ・ 65 歳以上の高齢者の割合は 38%であり、全国平均を上回っている。

<産業>

- ・ 沼津市戸田地区の産業は、平成 22 年度国勢調査によると、就労人口の約 58%が第三次産業に従事しており中でも「宿泊業・飲食サービス業」の就業人口が最も多い。
- ・ 第 2 次産業は、23%程度で推移しており、建設業と造船業関連の製造業が中心を占めている。

- ・戸田地区の観光交流客数は、平成 17 年から徐々に減少し、平成 26 年は約 18 万人であったが、近隣の大川流域で平成 27 年に「道の駅くるら戸田」がオープンし、約 37 万人と倍増した。

<交通>

- ・流域の交通については、海岸線を通る県道 18 号が主要幹線道路であり、地域活動の基盤である。

<歴史・文化>

- ・河川に関わる歴史や文化としては、井田大川近傍の「井田遺跡」が発見され、遺跡から弥生時代（紀元前 300 年頃～紀元後 300 年）から人々が生活を営んでいたことがうかがえる。
- ・安政年間、来日中のロシア使節プチャーチン提督は、安政東海大地震の被害により、座乗艦ディアナ号を失い、代艦建造地の戸田に滞在していた。幕府は先に締結した和親条約（第 6 条、領事駐留）改訂のため、勘定奉行川路左衛門尉聖謨を全権として戸田へ出向させた。川路は大行寺を応接所に当て改訂交渉を行った。（川路の下田日記）。
- ・流域には伝統的な神楽などの文化財が多く残されており、地域の五穀豊穡が望まれていたことがうかがえる。
- ・大行寺にはヘダ号建設時の船大工で、のちに造船技術者として活躍した上田寅吉の墓がある。
- ・戸田で廻船業を営んでいた松城家の住宅は、明治初期の擬洋風住宅として高い価値がある。

（2）治水事業の沿革と現状

<治水事業の歴史>

- ・大川流域では過去から幾度となく豪雨による災害に見舞われてきた。
- ・近代においても昭和 13 年、昭和 16 年、昭和 36 年の豪雨等により甚大な被害が発生し、特に昭和 36 年の集中豪雨では大川堤防が決壊し、家屋流出 21 戸、全半壊 29 戸、床上浸水 366 戸、農地の崩壊 50 町歩の被害を受けた。
- ・これらの被害を契機に、中流・上流において昭和 13 年～昭和 58 年にかけて床固工、護岸工、砂防堰堤の整備が実施された。
- ・しかしながら、大川における現況流下能力は、中下流部で確率 1/30 年の安全度を下回っている。
- ・近年の気候変動による集中豪雨の増加などにより山腹崩壊による土砂災害の危険性が高まるなど、河川の氾濫等により災害が発生した場合の被害は大きくなることが懸念される。

<現在の取組状況>

- ・現在、沢海川流域において、河川改修事業は行われていない。

<津波について（過去の津波被害）>

- ・沢海川周辺における過去の津波被害に関しては、江戸時代に発生した地震によるものが伝えられている。
- ・特に、嘉永7年（1854年）に南海トラフ沿いの沖合域を震源として発生した安政東海地震（マグニチュード8.4）では、東海地方から紀伊半島南東部にかけての太平洋沿岸部で甚大な被害が発生した。
- ・津波高さは大浦で3.5～5.1m、井田3m以下と考えられている。また、古記録によると大浦での津波到達時間は、地震の発生後5分以内であった。

<津波について（現在の津波対策）>

- ・これまでに津波対策による堤防の整備等を行われていない。

<津波について（最新の津波想定）>

- ・また、東日本大震災を踏まえた静岡県第4次地震被害想定（平成25年）では、発生頻度が比較的高く、発生すれば大きな被害をもたらす「レベル1の津波」と、発生頻度は極めて低い、発生すれば甚大な被害をもたらす「レベル2の津波」の二つのレベルの津波が設定されており、沢海川では、「レベル1の津波」は河川内を約0.2km遡上するとともに、「レベル2の津波」では、河川護岸及び海岸堤防を越流し、戸田漁港海岸で最大約42ha以上が浸水すると想定されている。

(3) 河川の利用

- ・沢海川流域の水利用については、現在記録されていない。

(4) 河川環境

<流況について>

- ・沢海川水系の水質については、現在環境基準の類型指定はされていない。

<水質・下水道整備について>

- ・沼津市戸田地区における下水道普及率（漁業集落排水人口を含む）は約70.0%と全国平均（平成26年度末：77.6%）に比べて低い、沢海川流域の下流部に公共下水道の計画がされている。

<生息する水生生物・鳥類について>

- ・現地調査を実施した中・上流部以外は三面張りの護岸が整備されている。
- ・1地点（中・上流部）で魚類調査を行った結果、魚類：1種、底生動物：4種が確認された。
 - ・重要種は確認できなかった。
- ・文献調査・現地踏査の結果より、鳥類（14種）、植物（29種）が確認されている。
- ・鳥類は水辺に係わる鳥類として、ゴイサギ、ハクセキレイ、セグロセキレイが確認されている。
- ・外来生物としては、鳥類（ガビチョウ）、植物（トキワツユクサ、モウソウチク）が確認されている。

（5）住民との関わり

- ・沢海川の中下流域では、沿川の集落と川との距離が近く、地域の営みの中に川が流れている。